

『ギーターンジャリ』とイエイツ序文 をめぐって

中山 浩 一

Gitanjali and an Introduction by W. B. Yeats

Hirokazu Nakayama

I

GITANJALI と金文字の表題を記した 青いクロス張りの 英文詩集を開けると、また同じ題字があらわれ、そのすぐ下に括弧して (Song Offerings) 「歌のみつぎもの」と英訳がつけられている。この本はラビーンドラナート・タゴール (Rabindranath Tagore) の作で、さらに「ベンガル語原典から著者が編集し英訳した散文体詩」(A Collection of Prose Translations Made by the Author from the Original Bengali) と内容の解説が入っている。これに「ウィリアム・バトラー・イエイツの序文添付」(With an Introduction by W. B. Yeats) が続く。この本の初版は白いリネンの表紙がつけられて、1912年にインド協会 (India Society) より750部限定で出版され、その中250部だけが販売にまわされたそうである。¹⁾ この版は少数なので入手は難しいが、手元にある1918年版は、体裁は異なるが内容の点では寸分違わない。ページを繰ると、「ウィリアム・ローセンスタインに捧ぐ」(to William Rothenstein) という献辞が眼に入る。余程の恩義のある人と考えられるが、ジョセフ・ホーンはイエイツ伝の中で、「ローセンスタインは英国で、タゴールの案内役をつとめた」²⁾ と書いている。なお人名辞典には、「サー・ウィリアム・ローセンスタイン、1872—1945、イギリスの画家、第一次大戦の従軍画家、ロンドンの王立美術学校長(1920—35)、ドガ、ホイッスラーの影響を受け、主として肖像画を描いた」³⁾ とある。イエイツはこの人物に宛てて次のような書き出しの書簡を送っている。

My dear Rothenstein, Your letter of August 24 only reached me today—sent on from London. I sent the text and book to Tagore

yesterday, and I expect my essay back from my typist on Monday. I think I had better send it to you. You will, I think, find it emphatic enough. If you like it you can say so when you send it on to Tagore.⁴⁾

(ローセンスタイン様、8月24日付のお手紙はロンドンから回送されて、本日到着したばかりです。タゴールには本文と『ギーターンジャリ』を昨日発送しました。それから私の方は、序文が月曜日にタイピストから戻ってくるのを心待ちにしているところです。その序文をあなたにお送りした方がよろしいと存じます。ずいぶん強い調子の書きぶりだとお感じになるでしょう。それでよろしければ、タゴール氏に転送なされます時に、そのように申されて結構です。)

上の引用でそれとなく気付いた点はこういうことである。この書簡の日付は1912年9月7日であり、イエイツ序文の末尾の同年9月と時期の上で符合する。タゴール詩集につけるはずのイエイツ序文の原稿が直接タゴールに行かず、一旦ローセンスタインに送付され、そこで内容の検討がなされてからタゴールに転送されている。手紙の内容は終始『ギーターンジャリ』出版にともなうことばかりで、ローセンスタイン個人にはまったく関係がないにもかかわらず、ローセンスタイン経由の迂回ルートをとっている。

以上の諸点から、タゴール英訳詩集刊行事業におけるローセンスタインの役割は極めて重く、その中心的推進者として、一切の世話に当たっていたと考えてよいと思う。またイエイツがタゴールに宛てた手紙は、膨大な掲載量のアラン・ウェイドの「イエイツ書簡集」には、どういうわけか一通も見当たらないのである。

1912年5月タゴールはイギリスに向けて旅立ったが、これは二度目であり、そのあいだ中、自作の詩の英訳に専念した。これより先の1877年に、弱冠16歳でロンドン大学に在籍した過去があったけれども、それから35年も経過しており、おまけに遠慮深い人柄なので、英訳詩集を出そうと思っても、ローセンスタインのような後見人がいなければ到底上梓できるものではない。異国のイギリスでは無名のタゴールが、高名なイエイツの序文を、自分の詩集の扉につけてもらえるとなれば、その評価は当然高まろう。だがこのような策は、タゴールにはおよそ縁遠いことであって、この辺を埋めるために、世故にたけた人物が介在したとするシナリオが無ければならん、と推測しても大過ないと思えるのである。

Ⅱ

ところで、『ギーターンジャリ』には二種類あって、157篇のベンガル語の詩集と、ここで対象としている英語の散文体のものである。英訳版は、同名のベンガル語原典の一部53篇と他の詩集から50篇、計103篇を収録しており、書名が同じでも原典と英語版の中味にはかなり相違がある。また英訳したのはタゴール自身だが、イエイツもその資料にある程度かわりを持ったと、アラン・ウェイドは次のように脚注している。

The selection published in the book was made by Yeats out of on immense mass of material, but he made hardly any alterations in the English of the Translations, which were by Tagore Himself.⁹⁾

(英語版『ギーターンジャリ』に発表された詩は、膨大な量の資料からイエイツが選別したものであるが、彼は翻訳の英語には少しも変更の手を加えず、タゴール自身がそれを行ったのである。)

なおタゴールの仕事ぶりは、単に原典をそのまま英語に写しとるのではなく、原詩の心を生かした立派な散文詩で、中には原典のいくつかの詩を改作し、まったく装いを新たにしたものもあると言われている。¹⁰⁾

題名の『ギーターンジャリ』は「歌のみつぎもの」を意味し、この世から無限なる世界へのみつぎものという深淵性を秘めており、特定の詩だけにつけられる視野の狭い言葉ではない。従って、タゴールの敬虔な詩ならどれにも向く名称で、原典と英語版の表題名が同一であっても何の支障も起こらないであろう。

再びローセンスタイン宛のイエイツの手紙の続きを見てみよう。

In the first little chapter I have given what Indians have said to me about Tagore—their praise of him and their description of his life.¹¹⁾

(第一章では、インドの方がタゴールについて語ってくれたことを記述しました。——インド人たちのタゴール礼賛と生涯の記録です。)

ここに記載されている通り、イエイツの場合、序文のねた探しは、インド人の語る話に依存する以外、どうしようもなかったようだ。強いてタゴールを調査する他の手

段をあげれば、文献の参照もあり得たであろうが、それをイエイツはしていなかった。事実、時間的余裕が無かったのである。つまりタゴールは1912年5月にイギリスに向けて出発し、同年9月にはイエイツの序文が寄稿されている。当時の旅行事情や出版に漕ぎつけるまでの曲折、それからイエイツの執筆準備時間を考慮に入れた場合、余りにも忙し過ぎるのである。その上この本が世に出る以前、丁度イエイツが『ギーターンジャリ』の序文を依頼された頃には、タゴールの名はベンガル圏ではいざ知らず、恐らくイギリスはもとよりヨーロッパ大陸でも、ほとんど知られるまでに至っていなかったろう。しかもイエイツに解読可能な英語のタゴール文献など、まだ現れていなかったと思える。まして、ベンガル語のタゴール文献の収集や理解までは到底不可能である。以上のように、タゴールと旧知の間柄ではなく、インド事情にもまったく暗いイエイツが、間接に人を介して頼まれ、短時日の間に、この本の印象を左右するような巻頭文を、なぜ引き受けたのか。この間の状況を報じている、イエイツ序文の冒頭の部分をお目にかけよう。

A few days ago I said to a distinguished Bengali doctor of medicine, "I know no German, yet if a translation of a German poet had moved me, I would go to the British Museum and find books in English that would tell me something of his life, and of the history of his thought. But though these prose translations from Rabindranath Tagore have stirred my blood as nothing has for years, I shall not know anything of his life, and of the movements of thought that have made them possible, if some Indian traveller will not tell me."⁸⁾

(二・三年前、私はある名高いベンガルの医者にこう言った。「私はドイツ人を誰も知らないが、もしドイツの詩人の英訳本が私の心を動かすことがあれば、大英博物館に出かけ、その詩人の生涯とか思索の遍歴を、わずかでも知らせてくれるような英語の書物をさがすでしょう。だがラビンドラナート・タゴールの英訳散文詩に、数年来、覚えたことのないほど感動を与えられたけれども、もしかしてインドの旅の人が話してくれないなら、私はタゴールの生涯や作詩を可能にした、思索の移り変りを何も知らないであろう。)

上述のように、序文執筆のそもそもの動機となったのは、「数年来覚えたことのないほど彼がタゴールの原稿に感動した」からに外ならない。この心境をイエイツは、

次のように生き生きと描写している。

I have carried the manuscript of these translations about with me for days, reading it in railway trains, or on the top of omnibuses and in restaurants, and I have often had to close it lest some stranger would see how much it moved me.⁹⁾

(私は翻訳原稿を何日も持ちまわり、列車の中で、あるいは乗合バスの上で、またレストランで読んだ。そして私はしばしば、わが心がどんなに動かされたか、他の人がわからないように、原稿を閉じなければならなかった。)

かくして、タゴールに魅せられたイエイツは、種々な悪条件を克服して、読者に強く訴える序文を書こうと意図したのだった。一方、前出のローセンスタイン宛のイエイツ書簡の後の方では、他人の話の真偽についての悩みを打ち明けている。

That I am anxious about—some fact may be given wrongly, and yet I don't want anything crossed out by Tagore's modesty.¹⁰⁾

(それが心配なんです。——中には間違ったことを書いたりしないだろう。でも私は、タゴールの遠慮深さのために、何一つ帳消しにしたいのです。)

イエイツの気遣いなどおかまいなく、唯一の情報提供者であるインド人の旅人は、「イエイツが感動するのは当然だ」とばかり、自分の心中を率直に告げる。

“I read Rabindranath every day, to read one line of his is to forget all the troubles of the world.”...

...“We have other poets, but none that are his equal; we call this the epock of Rabindranath. No poet seems to me as famons in Europe as he is among us. He is as great in music as in poetry, and his songs are sung from the west of India into Burmah wherever Bengali is spoken.”...¹¹⁾

(「私は毎日ラビンドラナート・タゴールを読む。彼の一行を読むと、世の中の困ったことを一切忘れるから。…」

…「私たちには他にも詩人がいるが彼に匹敵する人は一人もいない。私たちは今の時代をラビンドラナート時代と呼んでいる。ヨーロッパには、私たちの間のタゴールの名声にまさる詩人はいないと思う。彼は音楽においても詩と同様に長けており、彼の歌はインド西部からビルマ国内まで、ベンガル語の通ずるいずこの地域でも歌われている。…」

Ⅲ

ところで、このインド人の旅行者が語る、タゴールの生い立ちの概要はこうである。タゴールの人生は自然に親しみ、その美しさに魅了されることから始まった。幼少の頃から詩的素質に恵まれ、詩の湧き出る様子はまさに天才詩人の観があった。やがて対象が自然から人間に向けられると、愛の詩を書くようになった。

この旅行者の語り方はやや断片的で、承知していることをただ羅列するにとどまり、叙述に一貫性が欠けている。たまたま英国を訪れている、普通のインド人にたずねた場合、恣意的に物を言うのが当たり前で、分析整理を求める方がおかしいのかも知れない。

それにしても、タゴールの生い立ちや幼少時の詩に目ざめる様子、ベンガル文化や先人の影響、それから英国留学時代とか既刊の著書その他、詩人としての人間形成過程に関する序文中の説明は物足りぬきらいがある。インドの旅行者以外拠るべき資料もないので、致し方なかったのであろう。

例のローセンスタイン宛の手紙の末尾でそのことを述懐している。

I think it might be well if somebody compiled a sort of *Who's Who* paragraph on Tagore, and put after the Introduction a string of dates, saying when he was born, when his chief works were published. My essay is an impression, I give no facts except those in the quoted conversation.¹²⁾

(誰でもよいがタゴールの人物欄のようなものを取りまとめて、生年月日、主要な著書の出版時期などを、この序文の後に書き連ねてくれればよいのだが。わが論は私が受けた印象を書きつづったものである。だから引用の会話に出てくる事柄の外には、本当の事を一つも書いていない。)

著者を読者に紹介するにあたって、誕生日や主著も調べが付かぬ段階で執筆すれ

ば、事実を正確に伝えることをあきらめねばならない。結局、タゴールの詩を読み他人の話に耳を傾けて、心に映じたことを中心に論を進めることになる。その結果、読者はタゴールの人物像を的確に把握できず、一通りの表面的理解だけになってしまう。イエイツの歯がゆい思いが文面に溢れており、推察するに難くない。

なお、タゴール解説は次のように続けられる。

“...After that his art grew deeper, it became religious and philosophical; all the aspirations of mankind are in his hymns. He is the first among our saints who has not refused to live, but has spoken out of Life itself, and that is why we give him our love.”¹³⁾

(「…その後タゴールの芸術は次第に深化し、宗教的哲学的になった。彼の賛歌には人類のすべての願いが込められている。彼はわが国の聖人の中で生を拒否せず、人生のただ中であって、そこから語りかけてきた最初の人である。そしてこの故にこそ、われわれは彼に愛を捧げるのである。)」

ここには、芸術の深化がどのようにして起こったのか、一切追求されていないし、発展して宗教的哲学的になってゆく、必然性についての突っ込みの不足が目立つ。人生肯定に対する共感、それとして結構であろうが、ただ安易に肯定するだけでは、浅はかとそしられる恐れがある。その辺の水面下の支えとなる、確固たる宗教的乃至哲学的拠点が無くしてはならんように思える。

この芸術の深化のきざしについて、タゴールの論考『創造的統一性』(Creative Unity)の中の「詩人の宗教」には、こう書かれている。

子供のころ、庭の塀に沿ったココ椰子の並木が、地平線上の太陽を枝で手招きしているのが、わたし自身が生きるのと同じように生きている仲間だと感じられたことを、憶えている。周囲の世界をわたし自身の世界に変えたのは、自分の想像力——統一性を求め、統一性と交渉をもつ想像力であったことを、わたしは承知している。しかし、われわれは、この仲間意識が真実であったことを、よく考えてみなければならない。すなわち、わたしが生まれた宇宙には、わたし自身の想像好きな心と酷似する一要素があって、その要素は、すべての子供たちの本性のなかに「創造主」を目覚めさせるものであり、その「創造主」の楽しみは、自分の多彩な糸の図柄で創造という織物を

織ることに存するのである。その織物には、どこかわれわれと似通ったところがあり、そのために、われわれの想像力と調子が合うのである。われわれは、ある弦が他の弦と同調して振動するのに気づいたとき、この共鳴が自らのうちに永遠なる実在を体現していることを知る。世界が共鳴によってわれわれの想像力をふるい立たせるという事実は、この創造的な想像力が、われわれと存在の核心との両方における、共通の真実であることを告げるものである。¹⁴⁾

生長するにつれてタゴールは、自然と単に接するだけではなく、その中にあるたくさんの事物が自分と同じ生きものであり、仲間だと感じ始める。そう仕向けるのは、統一性を求め、周囲の世界と自分を関係づけようとする想像力であるところの「創造的統一性」だと気付く。そして宇宙には、この想像力と共鳴して創造に至らしめる要素があり、共振を覚えるとき、われわれは永遠なる実在を直感する。言いかえれば、この世の中にわれわれは、永却なるものの存在を確信したのである。

さらに人間は、自らの存在と外的事物との統一性をみいだして歓びを感じるだけにとどまらず、これにあこがれるようになる。そしてやがては深い信仰となり、人間性の中にある神性を意識する。しかしこれは、個人的体験を通して、個人が創造することによって到達し得るのである。表現されたものが自己の真実を伝えておれば、永遠なるもの——神——の感覚に至るのである。従ってこれは、直接体験する宗教の一つであって、論理の対象となる形而上学的体系ではない。

なお同じ論の別の章では、

人間は、創造をとおして、自らの真実を表現する。また、その表現をとおして、自らの真実を、充実した状態でとり戻す。人間社会は、人間の最良の表現のためにあり、その表現は、完全さの程度に応じて、人間を、人間性のなかにある神的なものの十分な感得へと導く。その表現が曖昧なときには、人間のうちにある「無限なもの」への信仰が弱くなる。そうなれば、人間のもつ憧れは、世俗的な成功という考えを乗り越えてゆかれなくなってしまうのである。人間の、「無限なもの」への信仰は、創造的なものである。¹⁵⁾

と、創造の場を人間社会とし、その表現を完璧ならしめることによって、神的なものを感じることができ、それが人間のうちに無限なるものを信仰に向かわせる。タ

ゴールの全作品は、このような確信が支柱となっており、かかる意味で、インド人の旅人の言う宗教的哲学的深化が生じたのだった。

もちろん、このような思索の発展は、意図的に、また偶発的に達し得ると考えるのは早計で、タゴールの血潮に流れている資質と文化的遺産が、それを可能ならしめたと判断しなければならない。つまり、ベンガルの詩人タゴールだからこそ、成し得たということになろう。そして当然、インド古代の哲学書ウパニシャッドの不二 (advaitam) は無限 (anantam) であり、不二は歓喜 (anandam) である——いわゆる「一は無限なり」、「一は愛なり」¹⁶⁾の哲理にもとらぬことになるのである。

ここで引用されている『創造的統一性』は、ロンドンのマクミラン社によって、1922年に出版された英文の単行本であるが、『ギーターンジャリ』英文初版本は1912年の発行なので、その間に十年の歳月があり、一見両者は無関係のように見えるが、奈良毅氏はこの点について、次のように述べている。

クリシュナ・クリパラニの「ラビンドラナート・タゴール伝記」(Krishna Kripalani "Rabindranath Tagore——A Biography——", Oxford University Press, London, 1962) によると、1912年英国でタゴールがバートランド・ラッセル卿に藪から棒に「美とは何ぞや」と問われた時、美学に対する自分の考えを述べたが、その時の考えをさらに発展させ、のちに『芸術とは何ぞや』という題で書いた論文を「創造的ユニティー」にのせた¹⁷⁾とある。

そして『芸術とは何ぞや』という論は、「詩人の宗教」のことであると 同氏は推測している。

タゴールはその生涯中、詩のほかに小説、戯曲、さらに芸術、教育、社会、政治と多岐にわたる論文を書き、また講演を行なったが、衆知のように、理論家というより創造の世界に住む人だった。従って、多彩な文筆活動中も創作活動が先行し、理論づけはあとにまわるのは当然のことである。しかしながら、確信のある芸術活動は、その活動の根拠となる原型が、すでに定着していなければ、できないはずである。言いかえれば、芸術活動が確かであればその理論化はそれほど至難とは考えられない、ということなのである。

1912年『ギーターンジャリ』出版の時点には、1922年「詩人の宗教」に盛られた芸術美学論を、すでに実践済み、またはその最中であつたわけである。かりにイエイツ

がその序文を依頼されたときに、タゴールと交渉を密にしておれば、クリパラーニの「タゴール伝」に記されているラッセル卿に語った程度の芸術論を、タゴールより仕入れることができたと思う。

けれども、先般来述べてきた如く、ほとんど二人は話し合っておらぬ様であり、序文には「詩人の宗教」論の片鱗すら、うかがい知ることはできない。その反面、そこには、一般庶民から眺められたタゴール論として、注目されて然るべきものがある。

たしかに、インドの人たちがタゴール芸術を愛好するのは、深淵な哲理というよりも、人生を拒まず生ある営みをつづける人たちのあこがれ——無限なるものが存在するという実感——がタゴールに横溢しているからである。インドの宗教とか哲学に昔からあった哲理を、親しみ易い形式の芸術に創造し、人びとに親近感を持たせた功績によって、やがてタゴールは、ベンガル・ルネッサンスの担い手として、最高の地位を獲得するようになって行くのであった。

IV

序文によれば、イエイツのところにはインド人がよく会いに来たらしい。そして奇妙に思えるほど、皆一様にタゴールを尊敬しており、これはヨーロッパでは普通、余り見られぬ光景である。率直で熱烈な崇拜は、ややイエイツを驚かせ、西欧社会の千差万別、議論百出の個人主義的現実との差異を痛感させたようである。

次いで、タゴールの由緒ある家系とめぐまれた家庭環境が、インド人によって語り伝えられる。そして、インドと英国の国情をくらべて、イエイツは次のように言う。

..., and said, "In your country is there much propagandist writing, much criticism? We have to do so much, especially in my own country, that our minds gradually cease to be creative, and yet we cannot help it. If our life was not a continual warfare, we Would not have taste, we would not know what is good, we would not find hearers and readers. Four-fifths of our energy is spent in the quarrel with bad taste, whether in our own minds or in the minds of others."¹⁸⁾

(…そして私はこう言ったのです。「あなたの国には、言いふらしたりあら捜ししたりする印刷物が、たくさんありますか。われわれには、とりわけ私の国には、しなければならぬ仕事一杯あるんです。ですから、われわれの頭はだんだん創造的でなくなっていますが、致し方ありません。もし、絶

えず生活闘争に明け暮れていないとしても、われわれには嗜みなど無いでしょうし、何がよいものか解らないし、聴衆や読者もできないでしょう。われわれのエネルギーの五分の四は、自他の如何を問わず心の中で、愚劣なものとの悪戦苦闘に費やされています。』)

今日の英国とヒマラヤ山麓に近い古来の風土のままのインドとは、生活や思想の点で、大きな違いがある。等しく現代文明の息吹にさらされていても、昔から一貫して人びとの心の奥に生きている素朴な心情に、イエイツが強く引かれている様子を知ることができる。このような英国とは違ったインド特有の風土の下で、自然を心としたタゴールの詩に対して、イエイツは次のように書いている。

These lyrics—which are in the original, my Indians tell me, full of subtlety of rhythm, of untranslatable delicacies of colour, of metrical invention—display in their thought a world I have dreamed of all my life long. The work of a supreme culture, they yet appear as much the growth of the common soil as the grass and the rushes. A tradition, where poetry and religion are the same thing, has passed through the centuries, gathering from learned and unlearned metaphor and emotion, and carried back again to the multitude the thought of the scholar and of the noble.¹⁹⁾

(これらの叙情詩は——インド人の言葉によれば、原典には不思議なリズム、翻訳不能な微妙な色彩の美しさや韻律の創意工夫に満たされているが——その思想の中には、私が終生夢見てきた世界が誇示されている。これらの詩は最高文化の所産であるが、牧草や藺草と同じように、今もなおどの土地にも生えている植物のように見える。詩や宗教が分離不能な同一物であるような伝統のおかげで、識者や高潔な人たちの思想が、既知の、また未知の、隠喩や感情から集められて、ふたたび庶民の手にかえされたのである。)

かくして、一般大衆の手に渡った叙情詩は、朗読されるのではなく、歌われて津々浦々に伝播していったようである。詩の言葉にメロディーやリズムが付く、いわゆる歌謡というより、最初から節のついた詩が、詩人から流れ出るのであって、イエイツは吟誦詩人を例にとり、解説に努めている。

When there was but one mind in England Chaucer wrote his *Troilus and Cressida*, and though he had written to be read, or to be read out—for our time was coming on apace—he was sung by mistrels for a while.²⁰⁾

(イングランドに唯一つの精神だけしかなかったころ、チャーサーは「トロイラスとクレシダ」を書いた。しかも彼は、読まれるために、または声を出して読まれるように書いたのであったが——われわれの時代がすみやかに迫って来ていたので——彼は少しの間、吟誦詩人に歌われたのであった。)

チャーサーは1300年代に活躍した、英国詩人の祖と仰がれた人であるが、タゴールはイエイツとほぼ同年輩の今世紀の人である。英国では、徘徊する吟誦詩人は、社会の変遷のために消えていったけれども、タゴールの歌は、都会や農村で、また川面で櫓をこぐときにも吟誦され、無心に遊ぶ子供や寄り添う恋人たちの口からもこぼれ、老若男女を問わず、皆一様に口ずさんでいると聞く。

At every moment the heart of this poet flows outward to these without derogation or condescension, for it has known that they will understand; and it has filled itself with the circumstance of their lives.²¹⁾

(いかなる時でも、タゴールの心は落ち目にならず、また手控えることもせず、このように波及してゆく。人びとに理解されるのは自明のことだったし、またそれには、人びとの暮らし向きが一杯詰っていたからである。)

ところで、どのように歌われたのであろうか。本の中の言葉の連なりだけではまったく見当がつかない。とはいえ、ベンガル語に造詣のある人には、原文から多少想像がつくかも知れぬ。だが英語の散文詩では、せいぜい詩の心を感じ取れるくらいで、原詩の旋律や韻律まで伝わって来ない。

詩の節まわしは、その民族特有のもので、長い間の生活から、すべての人が口ずさみたくなるような節の原型が、おぼろげながらすでに出来上っており、それが詩の言葉に浸透して歌となるのではなからうかと思う。従って、生活の同じでない異国人には、理解の困難な問題である。そこで、イエイツのあこがれの人だったモード・ゴン

(Maud Gonne) の娘の、若く美しいイシュルト・ゴン (Iseult Gonne) は、すっかりタゴールの詩に魅了され、原典から読もうとして、ベンガル語の文法書や辞書が欲しくなり、イエイツに要求していた、とジョセフ・ホーンは書いているが、²²⁾ 真に理解しようとするところまで徹底する必要があるのかも知れぬ。たまたま1912年8月には、イエイツはゴン家の人たちとノールウェイにおり、タゴール序文の仕事にとりかかっていたのである。²³⁾

こういう人たちのほかにも、イエイツは工作中、たくさんの文人より、タゴール詩集創刊の反響を得ていたと思うが、このベンガル特有の韻文の中味はどのようなものであろうか。

The traveller in the red-brown clothes that he wears that dust may not show upon him, the girl searching in her bed for the petals fallen from the wreath of her royal lover, the servant or the bride awaiting the master's home-coming in the empty house, are images of the heart turning to God. Flowers and rivers, the blowing of conch shells, the heavy rain of the Indian July, or the parching heat, are images of the moods of that heart in union or in separation; and a man sitting in a boat upon a river playing upon a lute, like one of those figures full of mysterions meaning in a Chinese picture, is God Himself. A whole people, a whole civilization, immeasurably strange to us, seems to have been taken up into this imagination; ...²⁴⁾

(ほこりが見えないように赤褐色の衣服を着た旅人、王家のいとしき人の花輪から落ちた花びらを、床の上で探している乙女、誰もいない家で主人の帰宅を待っている召使いや花嫁——これらの人たちは神を頼りとしている人の姿である。花花や川、巻貝を吹く音、インディアン・ジュライのはげしい雨や焼けつくような熱気は、結合とか分離の、あの情調のイメージである。また川面の小舟に坐り、リュートを奏でている男性は、中国の絵画に出てくる摩訶不思議な人物に似ており、神そのものである。われわれにとって限りなく奇妙な全国民、全文明は、このような想像力にとらわれたように見える…)

現実に点在する何げない情景が、ベンガルの地では、普遍的な意味を帯び神的なものとなって、人びとの心をとらえるのである。イエイツは、全く想像を越えた事態をこの地の文明に見出したのであるが、この件について、さらに解説している。

...we are not moved because of its strangeness, but because we have met our own image, as though we had walked in Rossetti's willow wood, or heard, perhaps for the first time in literature, our voice as in a dream.²⁵⁾

(われわれはその物珍しさのために感動しているわけではなくて、ロセッティのやなぎの森の中で散策していたときのように、わたしたち自身の姿に出合ったり、また夢を見ているときのように、恐らく文学の中で初めて自分たちの声を聞いたからなのである。)

つまり、インドの人たちがタゴールの詩に共感する所以は、詩が対象を客観的にとらえるのではなくて、人の心に内在するものに初めて出会い、その声を聞いたからである。われわれは通常感覚器官を働かせる場合、外界を対象とする。イエイツはタゴールを通して、インドの人たちやインド文明は、それ自身を見つめ、その内奥の声に耳を傾けるという特性があることに、心を動かされたのであった。そして、そういう声の聞かれる世界でタゴールの詩は生まれたのである。

...how can we, who have read so much poetry, seen so many paintings, listened to so much music, where the cry of the flesh and the cry of the soul seem one, forsake it harshly and rudely?²⁶⁾

(…われわれは肉の叫びと魂の叫びが一つに見えるところで、あれほど多くの詩を読み、あれほど多くの絵画を見、あれほど多くの音楽に耳を傾けてきた。そのわれわれが、どうして苛酷にしかも荒々しく、その世界を放棄してよいのだろうか。)

「肉の叫びと魂の叫びが一つに見える」世界とは、内奥の声の聞こえる世界を指すのであろうけれども、西欧ではこの世界を見捨てようとしているとイエイツは慨嘆するのであった。

IV

英文の『ギーターンジャリ』は1912年に出版されたそうである。そして翌年の1913年には、ノーベル文学賞をタゴールは受賞している。異例の速さでこの本は、世界各国から高い評価を勝ち得たのであった。

しかも同書は、現在、インド共和国とバングラデシュ両国にわたる、ベンガルの精神文化を見事に受け継ぎ、英語という言語を通して、東洋の思想を西洋文化の流れの中に投入し、意義あらしめたばかりでなく、東と西の精神文化の新たな関係へと発展させてゆく機縁を提供しているように考えられる。

奇しくもイエイツは、序文を執筆することになったが、執筆時間と情報の不足など悪条件下で、広い文化的視野に立った、公正な解説をしたことに対しては、敬意を表されるべきであろう。

なおまた、タゴールに限らず、イエイツの恩恵に浴した J. M. シングやエズラ・パウンドその他の人たちに対する支援に思いを馳せるとき、イエイツの人間性の豊かさこそ、先ず第一に注目されねばならぬことである。その意味ではタゴールは幸運であったと言えるであろう。

この小詩集のおかげで、タゴールは世界的な詩人となり、今日、盛んに愛読されまた研究されている。イエイツ序文は資料不足のため、やや完全さに欠けるところがあるが、その紹介による世間への貢献は筆舌に尽し難いものがある。

(注)

- 1) *A Bibliography of the Writings of W. B. Yeats*, Edited by Allan Wade, Rupert Hort-Davis, 1958, p. 249.
- 2) *W. B. Yeats*, by Joseph Hone, Macmillan & Co. LTD, 1962, p. 263.
- 3) 西洋人名辞典, 岩波書店, 1731頁。
- 4) *The Letters of W. B. Yeats*, Edited by Allan Wade, Rupert Hart-Davis, 1954, pp. 569-570.
- 5) *Ibid.*, p. 570.
- 6) ゴタール著作集第一巻, 第三文明社, 619頁。
- 7) *The Letters of W. B. Yeats*, 1954, p. 570.
- 8) *Gitanjali*, by Rabindranath Tagore, Macmillan and Co., London, 1918, vii.
- 9) *Ibid.*, xiii.
- 10) *The Letters of W. B. Yeats*, p. 570.
- 11) *Gitanjali*, vii, viii.
- 12) *The Letters of W. B. Yeats*, p. 570.
- 13) *Gitanjali*, ix.

中山 浩一

- 14) タゴール著作集第九巻，第三文明社，16頁（山口三夫訳）。
- 15) Ibid., 35頁。
- 16) Ibid., 10頁。
- 17) Ibid., 540頁。
- 18) *Gitanjali*, xii.
- 19) Ibid., xiii, xiv.
- 20) Ibid., xiv.
- 21) Ibid., xv, xvi.
- 22) *W. B. Yeats*, 1962, p. 263.
- 23) Ibid., p. 262.
- 24) *Gitanjali*, xvi, xvii.
- 25) Ibid., xvii.
- 26) Ibid.

(なかやま ひろかず 本学教授 英語)